145

側頭筋間櫛 Crista intermuscularis temporalis(假稱)の形成に就て

岡本 規矩男　吉田 貞治
(金澤醫科大學解剖學教室)

筋あるひは腱の附着部として骨表面に顯はれる隆起または陷凹は，骨の形態に對して，殆ど第一義的と稱しても差支へないものから，一見無意義な個體的變異と見做されるものまで，實に千種萬態を觀ることができる．然しながら後者のやうに一見無意義であるやうに見えながら，これを宗族發生學的な立場から調査して見ると，機能の變化に伴つて退行性動搖に陷つてゐる極めて有意義な形象である場合が存在する．勿論今日までの比較解剖學上の資料は人體の凡ゆる器官系統に亙つて夥しく蒐集されてゐるのであるが，斯樣な形象の存在に就ては，なほ今後と雖も機會あるごとに仔細に考究さるべきであると思ふ．

我々は人種解剖學的立場から北陸日本人頭蓋に關する觀察を行つてゐるうちに，顴骨側頭面に極めて稀ではあるが Sömmering の所謂緣突起 (Proc. marginalis) から起つて內下方に斜走する微弱ではあるが，骨の隆線が存在することを見出したので，この隆線が單なる個體的變異による形成物であるか，あるひは比較解剖學上何らかの意義を持つものであるかを檢討したいと考へ，さらに猿猴頭蓋及び類人猿頭蓋に就て觀察を行つた結果極めて興味ある結論を得たので，ここに報告して大方の御批判を乞ひたいと思ふ．

1. 人類頭蓋での觀察

我々が最初にこの骨隆線の存在を見出したのは金澤標本番號，第533號の北陸人男性34歲頭蓋でその所見は右側では顴骨緣突起基部の上端に粗糙な小豆大の隆起があり，その隆起から繼起したかなり著明な隆線が顴骨側頭面を稍〻內方に下行し，次第に低くなり顴骨上顎縫合の上方約 1 cm の個所で消失してゐる(圖1)．隆線經過の全長は略 1.5 cm を算する．左側顴骨では右側と略同樣な隆起した粗面

[醫學と生物學・第1卷・第11號・頁501－504・昭和17年6月5日]

が觀骨緣突起の基部上端に存在し右側で見られたよりも，稍ゝ弱い骨隆線がその部分から下行し經過方向，長さ，消失點等は大體右側に於けるものと同樣である．勿論，楔狀骨大翼の前端と觀骨の縫合部（楔狀觀骨縫合）には兩骨の縫合に際して形成された隆線が個體によつて樣々な强さで現はれることはあるが，上述した隆線は斯樣なものとは全然別個に觀骨の前頭楔狀突起の後緣と楔狀觀骨縫合の中間に觀骨緣突起から繼起して存在してゐるものである．そこで敎室所藏の晒曝頭蓋435例に就て斯樣な骨隆線が現はれてゐるものを調査した所，8例（1.8％）にこれを認め，その中3例（No.36, No.459, No.533）は左右兩側にかなり著明な隆線を顯はしてゐるが，他の5例（No.318, No.429, No.501, No.507, No.520）では極めて弱く殆ど痕跡的であつた．なほ1例を除いて他は悉く男性頭蓋で，その年齢別，性別，出現の强度等に關しては簡單のために表を參照され度い．

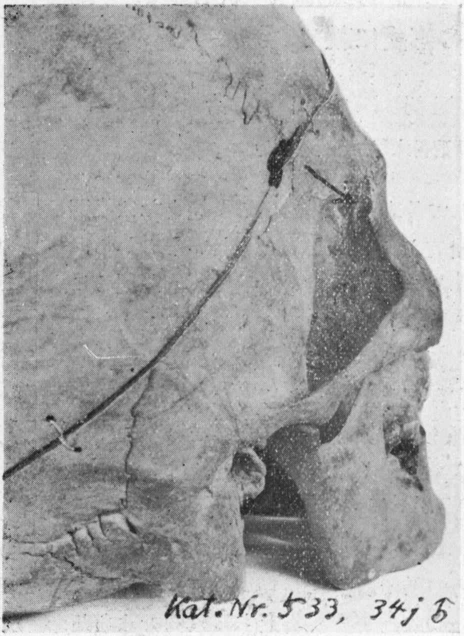

圖 1

側頭筋間櫛の出現を見た頭蓋の表

標本番號	No.36	No.318	No.429	No.459	No.501	No.507	No.520	No.533
性別	♂	♂	♂	♂	♂	♂	♀	♂
年齢	35	54	40	36	41	43	38	34
側頭筋間櫛出現の程度	兩側とも著明	左側弱し右側痕跡	左側弱し右側痕跡	兩側とも著明	兩側とも弱し	兩側とも痕跡	兩側とも弱し	兩側とも著明

2. 類人猿頭蓋での觀察

類人猿頭蓋として敎室所藏のオラングウータン2例と手長猿1例に就て觀察の結果，人類頭蓋で觀察したものに比し遙かに明瞭な骨隆線を認めることができた．

（圖2）．即ち顴骨緣突起から起つた骨隆線は最早隆線といふよりも寧ろ骨櫛に近い隆まりとなつて稍ゝ內下方に斜走し經過全長，約 2.5 cm に及び楔狀骨．前頭骨及び顴骨の三者合一する點に到つて消失してゐる．手長猿では隆線は比較的垂直

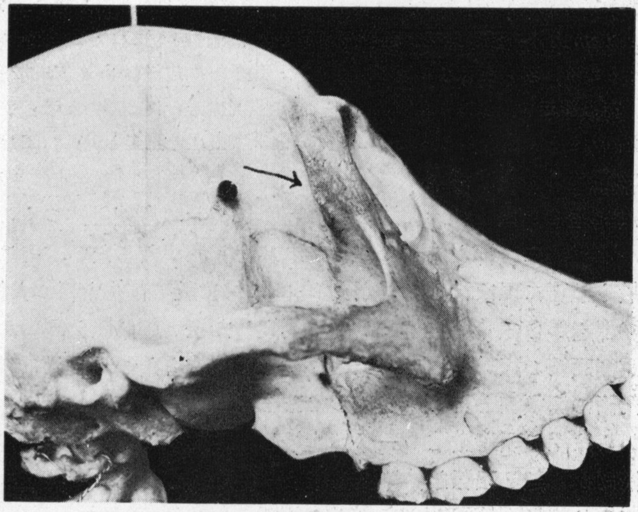

圖 2

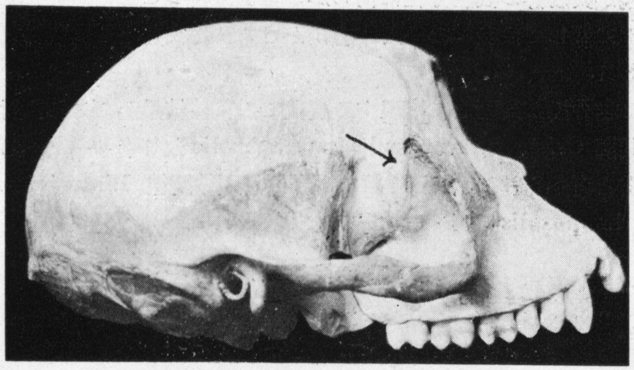

圖 3

に下行しその經過全長は 3 cm を超え顴骨上顎縫合の線に到達してゐる．以上の類人猿頭蓋に於ても本隆線は楔狀顴骨縫合部に見られる縫合に附隨する骨隆起とは全く別個のものであることは言ふまでもない．

3. 猿頭蓋での觀察

成熟，未成熟の猿猴（Macacus）頭蓋合せて 40 例に就て調査の結果一個の例外もなく極めて明瞭な骨線の隆起を認めることができた．特に猿猴頭蓋ではその隆まりは完全に骨櫛を形成してゐる（圖3）．即ち觀骨縁突起から恰も撮み上げたやうな高さ 2 cm 内外の櫛狀隆起が觀骨側頭面を内下方に向つて斜走し，經過の途次，次第に低くなり，略々觀骨弓の高さで觀骨，上顎縫合の上方 1 cm の個所で消失してゐる．櫛狀隆起の全長は平均 1.5 cm で人類頭蓋に見られたものと略々等しいが，頭蓋の大きさとの割合から比較するときは極めて強大な隆起と云はねばならぬ．

4. 本隆起の意義と命名

晒した頭蓋で見出された前述の骨隆起が如何なる意義を持つものであるかは，必然的に軟部との關聯に於て求められねばならない．そこで本隆起が最も顯著に現はれる猿猴類（Macacus）に就て剖檢を行つた結果，この櫛狀隆起から觀骨縁突起にかけて獨立した短い起始腱を持つて起る筋纖維が側頭筋の深，淺兩層の間に紡錘形の筋束となつて下行し下顎の筋突起内面に側頭筋とともに附着してゐるのが認められた．なほ骨櫛の側頭側からは深側頭筋纖維の一部が起始し，前面からは淺側頭筋の纖維が起り櫛縁から起る強靱な結締織纖維は一部外後方に向つて腱樣中隔板に合してゐる．

本隆起が咬筋群の機能分化に何らかの關係を持つことは想像に難くないがこれに關しては我々の一人，吉田がさらに縁突起との關聯に於て研究中である．

最後に本骨櫛が典型的に出現する猿猴での剖檢結果からこれに對して側頭筋間櫛 Crista intermuscularis temporalis なる名稱を與へるのが最も適當と考へられる．勿論隆線の場合は側頭筋間線 Linea intermuscularis temporalis とすべきである．

（受附：昭和17年5月9日）